

氏 名 ^{たけ}竹 ^{しま}島 ^{なお}尚 ^{ひと}仁
 学位(専攻分野) 博 士 (文 学)
 学 位 記 番 号 文 博 第 117 号
 学位授与の日付 平成 10 年 11 月 24 日
 学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
 研 究 科 ・ 専 攻 文 学 研 究 科 哲 学(哲 学)専 攻
 学 位 論 文 題 目 論 理 と 世 界

——ヘーゲル『論理学』を理解するために——

(主査)

論文調査委員 教授 伊藤邦武 教授 藺田 坦 教授 藤田正勝

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は難解をもって知られるヘーゲルの『論理学』について、それをいかなる観点から理解することがもっともその意義を明らかにすることになるのか、という問題設定のもとで、その全体の構成と各部分の内容の分析を行ったものである。

ヘーゲルの「学の体系」は、論理、自然、精神の全体からなるが、論理学はこの体系の一つの部分となすとともに、その体系全体の本質の叙述という性格も付与されている。それは、ヘーゲル自身の用いた神学的表現によれば、創造以前の天上の神の叙述であるとともに、神によって創造された地上における自然と精神の本質を述べたものでもある。そこで、論理学はもっとも抽象的な概念の体系であると同時に、具体的な現象世界のあらゆる存在の本質を凝縮して提示したものであるということになる。しかし、論理学がこのように、もっとも包括的な理論であるとともにもっとも抽象的な理論でもあるという性格をもつことは、この理論の理解をきわめて困難なものにする。そこには、「存在」から始まって「絶対的理念」にいたる、非常に数多くのカテゴリー、あるいは「論理規定」の展開がみられるが、それらはややもすると抽象的な概念の羅列としてのみ理解され、また、それらがいわゆる「正—反—合」の弁証法の論理によって機械的に並べられたかのような印象を与えがちである。

本論文は、このような『論理学』の特異な性格から起因する理解の困難さを克服するために、その解釈上の方法にかんする一つの方向を提示する。それは、『論理学』の主題が、「存在と思惟の一致」ということを明らかにする点にあることを認めたとうえで、このような主題の設定のためには、その出発点に「存在を思惟する」という根本事象に密着した「世界理解」という志向が働いていなければならないこと、また、「存在を思惟する」という根本事象の前提を認めるならば、論理学に現われる個々の論理規定の内実とそれらどうしの連関とは、ヘーゲルが強調するように、論理外の一切の経験から独立に、自律的に理解されるわけにはいかず、むしろ、論理外の日常的な経験の具体的なありかたへの参照を含まずにはその意義を特定できないであろう、という反省にもとづいて設定される方向である。筆者はこのような反省にもとづいて、『論理学』の主要な論理規定の意味とそれらどうしの連関のありかたを、我々の日常的な経験の具体的な成立の場面に即して説明し、あわせてその経験を表わす基礎的な言語表現の形式と当該の論理規定との対応を示そうとする。その分析は『論理学』を構成する「存在論」「本質論」「概念論」に現われる主要な論理規定についてのみ行なわれるが、筆者によればこれらの分析の具体例が「経験則」を構成し、そこから『論理学』全体のより包括的な分析の途が開かれるであろうとされるのである。

本論文全体は四章からなり、それらに前後して「序」と「結論」が加えられている。「序」は以上のような本論文の問題意識を概略的に述べたものであり、「結論」は本文での分析の要点を再説するとともに、論じ残された点を確認するものである。第一章「論理学とは」は、「論理学の特徴」「論理学の方法の限界」「論理学を理解するとはどのようなことか」「論理学の概略」の四節からなる。第二章「客観的論理学(存在論)」は、「存在、無、そして成」「定在」「或るものと規定性」「質的無限性と対自存在」「思惟と存在」の五節からなる。第三章「客観的論理学(本質論)」は、「本質と仮象」「反省規定」

「対自存在と本質」の三節からなる。第四章「主観的論理学（概念論）」は、「思惟の思惟」「概念とは」「判断」の三節からなる。

これら四章のうち、最初の第一章が、筆者の『論理学』全体にかんする分析の視点と、そのような視点の必要性を、これまでの『論理学』研究における伝統的アプローチとの対比のもとで説明する部分であり、それ以降の三章は、この全体的理解の有効性の具体的な例証として、『論理学』各章の主要な部分にかんするコメントリーを提示した部分である。以下、これらの広範囲にわたる分析のなかから、とくに本論文の骨格をなす論点のみを挙げると次のようになる。

まず、第一章の「論理学とは」で筆者は、『論理学』が『自然哲学』や『精神哲学』にさきだった、学の体系の本質的骨格の叙述でありながら、同時にわれわれの世界理解の基礎にある論理規定の発展的連関の叙述でもあるという、ヘーゲルの論理学観に独特の困難に注目する。ヘーゲルによれば、論理学のなかで個々の論理規定はそれに先行する論理規定に対立しながらも、それよりも豊かな内容をもつものになっていなければならないとされている。このような発展的な導出はいかにして可能になるのか。この問いに答えるために筆者が想定するのは、論理学はなるほど学体系的な体系の実質的な部分からは独立であるが、それが「存在を思惟する」という根本的事象を分析の出発点にしている以上、始めからわれわれの経験におけるさまざまな存在者の存在の意味についての先行的な理解に依拠しているものであり、その限りで「論理外」の事実をつねに参照しつつ進行せざるをえないはずである、ということである。

筆者はこのような想定にたつことで、存在論、本質論、概念論において展開されている主要な論理規定の導出の具体的なありさまが説明できるならば、そのことは「存在と思惟の一致」というヘーゲルの論理学の根本的な主張に具体的な内実を与えると同時に、一方では、論理学が「否定の否定」という唯一の方法によって構成される概念の体系であるとしたヘーゲルの要求が、かなり過大な要求であったことを明らかにすると主張する。そしてこの主張を裏づけるためには、本質論において「自己関係の否定性」と特徴づけられる「本質」の根本的存在構造が、すでに存在論の「対自存在」において同種のものとして明らかにされていること、しかもその説明の理解のためには、われわれの日常的な経験（たとえば「この鉛筆は赤い」というような経験）の成立の構造への理解が深くかかわっていることが、分析されなければならないとする。さらに、概念論における概念や判断の説明が、存在論と本質論におけるこれらの構造分析に立脚しつつ、やはり論理外への参照をつねに保持していることが認められなければならないとする。そこで、これらの事実をヘーゲルのテキストの具体的な叙述に則して確認することが、本論文の以下の分析の主たる目標となる。

第二章「客観的論理学（存在論）」では、「存在」から「対自存在」までの論理規定の推移の具体的なありかたが解釈される。そこで強調されることは、この推移のステップが、「この鉛筆は赤い」というような日常的経験への参照によって始めて内容を付与できるものであるとともに、存在論の後につづく本質論においてその意味が明らかにされる「反省」の働きをも同時に認めた、複眼的なものであるということである。とくに、「対自存在」として根本的に特徴づけられる存在には、否定性と自己関係性という、本来「本質」に帰せられるべき二重の本性が、すでに明確に認められていると解釈する。

第三章「客観的論理学（本質論）」では、「仮象」から「根拠」までが扱われる。ここでの要点は、本質と仮象との相即的な関係が、本質論と存在論との関係を明らかにする役割を担わされていること、また、同一性から根拠へと至る「反省規定」の展開のステップが、存在論における対自存在までの推移の正確な再論になっているということである。

第四章「主観的論理学（概念論）」では、概念、判断、推論を解明する「主観性」の部分が分析される。筆者によれば、ヘーゲルはこの主観性の章で、存在と思惟の統一ということの実質的な意味を、思惟形式と存在形式の内在的な連関を示すしかたで与えているとされる。というのも、たとえば概念における普遍から特殊、個別への展開は、これらがたがいに他のものを含みながら、それぞれ自立的に捉えられるものであることを示すのであるが、それは一方で、概念が完全に規定されて個別となる過程が、概念の規定が無力化されて偶然という論理外のものに直接向き合う次元を認める過程でもあることを、示すことでもあるからである。同様に、定在の判断における肯定判断への過程も、主語となる個物の存在定立と述語づけの無限の距離の確認への道程として解釈される。これらの分析をつうじて、思惟がその自己活動を対象化して反省する概念論こそ、存在と思惟の統一をもっとも明示的に論証した部分であることが明らかになる、というのがこの章の結論である。

最後に、「結論」において、以上の分析の筋道が要約され、この分析の始めに提出された想定、すなわち、「世界理解」という志向を担わされた論理学の実際の論述が、われわれの日常的な経験の分析との参照によって始めて有意義なものと認められるのではないかという想定が、それ自身一つの経験的事実として確立されたという確認がなされる。そしてこの事実が、

ヘーゲルの論理学の体系が、現行のものとは別の形で秩序づけられうる、改変の可能性を含んだ体系であることを意味しているとされる。筆者の解釈では、世界理解の根本的素描としての論理学の意義は、このような体系の解放性として捉えられるべきであるとされるのである。

論文審査の結果の要旨

ヘーゲルの哲学は、論理、自然、精神の全領域を包括する学の体系を示すことによって、「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」ことを証明しようとした、きわめて野心的な哲学である。そして、彼の『論理学』はこの体系の一部であるとともに、あらゆる領域にわたる学の本質的なものをまえもって提示するという役割をもつという、非常に複雑な性格を付与されている。それは「存在論」「本質論」「概念論」の三部から構成されているが、その内容は、「存在」から始まって「絶対的理念」にいたる数多くの論理規定の、自己発展的な展開のありさまを記したものである。

ヘーゲルはこのような論理規定の相互連関をつうじた展開の記述を与えることによって、最終的に「存在と思惟の一致」ということを示そうと試みたわけであるが、論理学が自然や精神の学に先だって、それらとは独立に構成されなければならないという要請のゆえに、結果として構築された論理規定の体系はまったく抽象的な叙述の連鎖になっている。そこで、従来このテキストにたいして示された解釈は、ただヘーゲルの叙述を要約的になぞるか、あるいは、その内容を便宜的にさまざまな事例に置き換えて説明するものが多かった。いわば、論理規定の導出の方法にかんして、ヘーゲルの説明を批判的に再吟味するという手続きを経ないままに、その抽象的な記述の内容を推量するという姿勢のもとでの研究が少なくなかったのである。

しかし、近年、伝統的な論理学にたいする強力な批判をつきつけた現代の形式的記号論理学の成果に逆に刺激を受けるかたちで、ヘーゲルの弁証法的論理学についても、その方法論的手続きの妥当性にたいする批判的検討にもとづいた、新しい解釈の方向を打ち出そうとする試みがいくつかなされている。そのような試みの一つの方向は、『論理学』における多くの論理規定の連関を、単に「否定の否定」という単純な方針にしたがった、機械的な作業と考えるのではなく、ヘーゲルの論理規定の導出が、一方では「経験の可能性」の条件を列挙するというカント的な視点にしたがって、われわれの日常的な経験の背後にある概念的な制約を洗いだしつつ、他方で、個々のカテゴリーあるいは論理規定の意味を、論理規定どうしの体系的連関のなかでの位置によって再調整するという、複眼的な方法として理解する方向である。本論文は、このような最近の『論理学』研究の方向に基本的に同意しつつ、さらに論を進めて、こうしたカテゴリーの再調整あるいは再構築としての論理学の構成は、それ自身哲学的に有意義であるとともに、ある意味ではヘーゲルの方法論の基本的な前提にたいする批判をも含意していることを認めなければならない、と主張する。本論文はこのような観点から、『論理学』の主要な部分の再解釈を試みた、それ自身野心的な研究である。

本論文の実質的な内容は、このような基本的な観点からする『論理学』の主要な部分にかんするコメンタリーからなるが、その独創的な成果として、とくに次の二点を挙げることができると思われる。

一つは、このような観点にしたがって『論理学』を読むことによって、このテキストにたいして従来から指摘されている、「存在論」「本質論」「概念論」という三部構成の順序にかんする、いくつかの疑問点に答えることができるようになる、ということが示された点である。ヘーゲルの学の体系の構想を論理、自然、精神の順序でなるものとする、その本質的な筋道を抽出した論理学そのものが、本質、存在、概念の順序のもとで展開されなければならないはずであるが、実際の『論理学』では、本質と存在の順序が逆転している。しかし、筆者が本論文で主張するように、ヘーゲルの論理規定の導出の手続きが、「存在を思惟する」という根本事象の了解を出発点としつつ、われわれの日常的で個別的な経験を具体的に吟味し、その内実を追っていくというものであれば、この順序はきわめて自然なものと理解される。そして、存在論において「存在」から「対自存在」にまで分析を深められたわれわれの対象把握の各段階が、本質論においても一度、反省の運動という観点から順番に再認識されることによって、本来の本質と存在の順序が確立されるのである、という説明は説得的である。

また、このような理解の方向に従えば、ある意味では、ヘーゲルの言う論理学における一切の学と経験からの独立性という主張を崩すことになるという点については、筆者はとくに、概念論のなかでの「普遍、特殊、個別」の箇所を取り上げて、そこではヘーゲル自身がその論理学の公式的な意味づけを破っているということを指摘している。筆者によれば、存在論に

おける対自存在も本質論における本質も、根本的にはわれわれの日常的な経験のなかで出会われる個物を基礎に理解されているのであるが、概念論において、普遍や特殊と対比される個別は、まさしく本質としての具体的な事物が、それ自体概念として思惟の対象となりうると同時に、この「思惟の思惟」が論理の外部との接点をどこかでもたざるを得ないことを例証するものである。ヘーゲルはそこで、「個別性は概念の自己自身への帰還であるだけでなく、直ちに概念の喪失である。概念は個別性において自己のうちにあるが、また個別性を通じて概念は、自己の外に出て、現実性へと歩みいる」と述べているのである。本論文を『論理学』のコメンタリーとして見ると、その分析は存在論から本質論を経て概念論におけるこのような主張までの道筋を解き明かしたものになっているが、そこに至る論述のステップは堅実であり、また明快である。

筆者はこのような分析をもとに、その結論として、ヘーゲルの『論理学』をわれわれの日常的な経験の概念的制約の再構成的な体系化として解釈することの有効性が、一つの「経験則」として確立されたとしているが、このような試みの意義は本論文によって十分に示されている。とはいえ、以上のような理解にもとづいて、さらに実質的な学の体系である、自然哲学や精神哲学への橋渡しが成功するのかいなか、また、ヘーゲルがその論理学の構築によってそれに先行する諸哲学体系との対決を果たそうとした面が、このような解釈のみで十分に説明できるのかどうかという点にかんしては、なお疑問の残るところである。しかし、これらの問題は筆者の今後の研究課題ともいえるべきものであり、本論文の価値を著しく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお平成10年9月18日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。